

## 施設のこころ

先月の「父の日」、私たちの二つの施設でも「父の日」の行事が催された。それぞれの入所者自治会の計画で。重度の障がい者施設「騰々舎」の人たちは私を「父」としてあいさつを送った。「父の日に当たり花束をお贈りします。日ごろのおせわに感謝をこめて。私たちを見守っている目を大切に、いつまでも元気でいて下さい」と。

最近目を悪くしているので、思いやってくれているのである。しかも、その目には「私たちを見守っている」という深い期待がこめられている。たしかに施設に運命を託する者にとって、施設の責任者が真実自分たちを見守っているかどうかは重大問題である。

私はふだんは施設内の草取りを主な仕事としてにすぎないが、彼らの着眼は鋭い。果たして期待通りであるか、私は内心じくじたる思いをする。

騰々舎が終わって、隣接の老人ホーム「任運荘」の行事に出る。老人代表の祝詞―「任運荘のお父さん。いつも土にまみれてきれいな花を咲かせて下さる、こんなおや

じさんが私たちの自慢です。近ごろはめっきり白髪もふえましたね。いついつまでも今までのようにお心広く私たちを見守って下さい」。

私は驚いた。二人の代表の言葉が「見守って」ということで一致していたから。しかし、これは偶然ではなく、本質的一致というべきであろう。施設生活者にとって、しっかりと見守られていることは最低ぎりぎりの要求であるのだ。「見守る」とは。ただ守るだけではないけない。真実を見つめて守るのだ。また、ただ見るだけではないけない、手を出し体を張って守る行動が伴わねばならない。私ごとき者、父の日だけでも施設の父とよばれる資格は毛頭ないが、この日この言葉を、私の福祉再出発の原点にしようとひそかに誓った。

(一九八三年七月九日)